

えっ、世間ふつうの人は、そんな下品な言葉は使わな
いって？ これは驚いた。

イヤ、どうもすみません。やっぱり私は、世間並み以
下なのでしょかネエ。

ハテ、どこかで話がドマダしました。もとにもどりま
しょう。

くわしいいきさつは知りませんが、旭硝子尼崎工場の
所長（というのか、工場長というのか知りませんが）と、
柄谷工務店の社長は古い友人だそうで、尼崎工場の建設
関係の工事、大は工場、事務所ビルの新、改築から、小
はペンガラヘドロの掃除まで、一切合財、柄谷の独占で
す。

柄谷は敗戦当時は小さな組だったそうですが、今のよ
うに大きくなったのは、旭硝子の復興と歩みを一つにし
ていると言われています。

何しろ、両者の関係というものは、竹中、鹿島、大林
などの大手建設業者が割り込もうとしても、はね返され
るほどに強力なのだそうです。

事実、旭硝子と同じ三菱系の日本シボレックスが尼崎
に工場を建設したとき、前記のような大手も何社か入札
に参加したのに、結局落書き通り柄谷が落札したという
話もある位なのです。

庫がそこに建つことになると、たちまち、現場は追っば
らわれてしまいました。

どうも、話がかたくなりました。少しやわらかい方に
変えましょう。

柄谷には、松本組以外にも土工の下請けが二、三人入
っていたと書きました。何組と言ったか、おぼえていま
せん。一つだけおぼえているのが松田組です。

松田組はかなり大きな現場を第二阪神国道沿いに持つ
ていて、旭硝子からも、柄谷の事務所からも近かったの
で、勿論、旭硝子にも入っていました。

いや、松田組にとって旭硝子の仕事が大だったのかも
しれません。

土工、と言っても、実は掃除、片付けのような仕事が
専門でしたから、土工というより手伝い人夫といった方
が正しいでしょう。それもペンガラ掃除のような仕事は
出来ず、もっと軽い作業ばかりやっていました。

松本組の仲間たちは、松田組の仲間たちを一寸ケイベ
ツする目でみていました。

「阪神間でその名もよくコンクリの松本」

と、大分ハッタリがあるにせよ、そんな誇りを持ち、
土方は職人なんだと思っっている威勢のいい若い衆たちの
目には、掃除、片付け専門の松田組なんて、どうにも幽

と言わねば、柄谷工務店は旭硝子尼崎工場の中に常
設の現場事務所を持ち、建設関係から運送業務、日常の
営業関係まで一手に引き受けているのです。今はどうか
知りませんが工場の通用門には、旭硝子の守衛の他に、
柄谷から出向している倉庫番（工場の中に、柄谷専用の
大きな道具倉庫がありました）が朝夕詰めて、出入りの
トラックや、駕、土工などをチェックしていました。

柄谷には、駕、土工は勿論、大工、左官、はつり屋、
電気屋、水道屋、屋根屋など、たく山の業種の下請が入
っていました。土工関係では飯野以外にも、二、三の
組があったと記憶しています。

飯野建設には、松本組を下請にかゝっている他に、直
属の土方、人夫を少しは連れていましたが、ほとんど片
付け専門でした。だから旭硝子の常備仕事なんかは、そ
の人たちの受け持ちである筈なのですが、飯野の本社が
西宮戎の近くにある関係から、尼崎の柄谷関係の仕事は
松本組の受け持ちになっていました。

ですから、旭硝子の中で土方仕事といえはそういう系
列はちゃんとありながら、柄谷から飯野を通り選して松
本組、というような所がありました。

それ故、松本組の現場は、柄谷の口聞きで、旭硝子の
所有地に建っていた位です。もっとも、後に旭硝子の倉

がゆくて、自分たちと一列には見られなかったのです。

そんな仕事ですから賃金も安く（昭和三十五年頃、四
百一五百円）、顔ぶれを見ても老人だったり、弱々しそ
うだったり、気力も体力も、松本の仲間よりはっきり落
ちました。

松田組の親方というのは、その頃もう五十を過ぎてい
たでしょうが、しよぼしよぼした小男で、土曜屋の親方
らしい凄味や、貫録は、クスリにしたくも感じられない、
そう、作業服で旭硝子の構内をウロウロしていると、便
所掃除のおっさんかと間違われそうな、貧相な人でした。
それも、年をとってしよぼしよぼしたという感じでは
全くなく、若いときから決して重労働には向かなかった
だろうと、一目で想像出来るはつきりなのです。

話をしてみても、決して話上手ではなく、私たちと話
をするときさえ、すぐ伏目勝ちになっってしまうようなオ
ドオドしたところがあります。

あんなんで、五十人もの配下をよく押えていけるもの
だと、不思議でさえありました。

何でも、その頃（昭和三十五、六年頃）から数えて十
年にもならない以前には、旭硝子で掃除片付け専門の日雇
人夫だったそうです。

それが自分同様な仲間を少しづつ集めて、手配師の真

似事みたいなきことをしているうちに、いつの間にか大きくなり、柄谷のバックアップもあつたのでしようが、坂場をもつて親方になり、その頃にはもう、柄谷以外にも人夫を供給するようになっていたのです。

だから、見かけによらぬ才能を、その貧相な体のどこかに持っていたのでしよう。

もうお気づきでしょう。松田組は人夫出しでした。ただ、この親方には人夫出しという言葉が持つ凶暴で、陰險なイメージが少しもないのです。

旭硝子硝子工場も、柄谷工務店も、そして松田組の坂場も、阪神出屋敷駅から、ごく近いのですが、その出屋敷近辺というのが、御存知の方も多いでしょうが、ミニ釜ヶ崎とよばれるような土地です。

駅前には毎朝、アンコが集まる寄り場になっています。わずかですがドヤもあります。安い飯屋があり、古物屋と質屋があり、ホルモン屋があり、屋台があり、パチンコ屋があつて、シンペン臭い映画館があり、大衆床屋があり、飛田のかわりに出屋敷パークがあるというように、何から何まで「釜ヶ崎」を小さくしたような町です。

その出屋敷へ出るのに、松田組から歩いて約十二、三分、私はよくホルモン屋や、屋台で安酒をのみました。そのころは密造のドロップを飲ませる穴場がいくらでも

あつたのです。

すると、そんな場所でもよく、松田組の親方に出会いました。

人夫出しの親方といえば、メッシュのピカピカした靴かなんかはいて、似合いもしない気障な背広にナントカ組の代紋を光らせて外車を使い廻し、テカテカ脂ぎった顔をして、バアやキャバレーで東ピラを切っている厭らしい奴を想像をしますが、松田組の親方はまるで違ふのです。

着ているものは、そこらの土方や人夫の作業服みたいなものだし、外車どころか、車に乗っているのさえ見たことがありません。まア、背広なんか、とても似合うような人じゃないんですが。

そして、飲みに行くのが、私たちが行きつけの、うらぶれたおでん屋とか、ホルモン屋とかです。

いつも一人で来て、ひっそりと飲んでいるようで、自分の組の者をつれて歩いているところを見た記憶もありません。私たちのような顔みしりにそんな所で出会っても、エントコ見せて「おどつてやろう」なんて決して言いません。だから、使う金もしれていたと思います。

たまに私たちが、

「親方、たまにはおどつてえな」

なんて言っても、口の中でムニャムニャとごまかしておしまいです。

そのかわり気がおけない人でした。一緒に飲んでいて肩がこるとか、気を使うとかということがありません。

かえつて親方のほうで、私などに遠慮して邪魔にならないうようにしている。そんな感じでした。

そうは言っても、同じ柄谷の系列の、仮にも親方とよばれる人です。現場でもよく顔が合います。気がおけない人だと言つても、それなりの礼儀というか、尊敬というか、そういうケジメはつけていました。

そのケジメとは別に、私はこの人に好意を感じていました。

一ところが或る日、

その好意がひっくり返ってしまうような噂を耳にしたのです。それは大体こんな話でした。

「松田組で働いていた夫婦者へたぶん亭王は人夫として現場に出、家さんは炊事婦として働いていたのでしよう。人夫出しに限らず、坂場ではよくあるケースです」の、亭王が現場に出た留守に、親方がその家さんと関係して、しまいには亭王を追い出してしまった」

初めはウソだろう、あの人の好きそな親方にそんな芸当が出来る筈がない、と思つていたのですが、やがてま

た別の人からも、同じような話をきかされたのです。

「あれは松田親方が暴力で女を押さこんだんや」

「いや、女は相手が親方やから、仕方なしに言うことを聞いたんや。泣く子と地頭には勝てへん」

「二十も年の違ふヨメさんを持つて、松田親方はホクホクしている」

「ヨメはんでなうて二号や。しゃアけどこの頃は組御氣どりやいう話や」

いろんな人の話をきくと、噂は真実、と思わざるを得ません。

暴力で押さこまれたというけど、あんな小男、いくら女でもはね返せないはずはないと思いますが、相手が親方だからクビがこわいという理由をきかされると、納得出来ます。

女は、金に目がくらんだんや。何しろ松田親方は持っているから、というのも、ありそうな話です。

そういえば、その頃から松田親方の服装がどこことなく派手になって来ました。今まで通り、作業服なのですが、よくみると、服も足元も、高価な新品に変わっているのです。

私は、そこまで噂を聞かされ、親方を観察しながら、まだ半信半疑な気持ちをどこかに残していました。

そして或る夜、出屋敷のホルモン屋で出会ったときに（よせばいいのに）親方に言ってみたのです。

「親方、この頃、顔色がよろしいなア」

「アア」

ウフウフと、のどがつまったような声で松田親方は笑いました。

「何ででんねん。若いヨメはんもらいはったからでっか」
返事はありませんでしたが、顔は晴しように笑っていました。

傍から誰かど、私よりもっと露骨な言い方で（多少の非難をこめて）、何か言いました。同じような笑顔が返ってくるだけでした。

それは結局、噂を肯定したことになるとしか思えませんでした。

私が初めて見た人夫出しの親方の横顔です。もう少し続きを書きたい気もしますが、バ切日を過ぎてしまつて編集者に迷惑をかけていますので、あとは次号—ということにいたします。

印紙について

仕事に行つて印紙を貼つてもらうのが、矛盾している事があります。印紙代として、金を取る所と取らない所があります。決まつてがメツイ人夫出しの飯場などは印紙代を取りません。当然のようには。

金銭にこそは少ないお金ですが、問題は印紙代がなせころもまちまちがといふことです。印紙代を取るのが正しいのか、取らないのが違反なのか、ゆくわれわれには納得できないのです。

その日ぐらゐの私達に「認印」は大切な事です。明快であり、皆んなが納得できることを印主にお任せです。

K生

印紙代は印紙料の徴収等に關する法律

印紙代は印紙料の徴収等は、印紙料の徴収

印紙代は印紙料の徴収等は、印紙料の徴収

印紙代は印紙料の徴収等は、印紙料の徴収